

## 論文審査の結果の要旨

氏名： 藏 屋 伸 子

博士の専攻分野の名称： 博士（総合社会文化）

論文題名：Comparison of Politeness Levels in American English and Japanese Requests: Analysis of Behavioral and Linguistic Data from American and Japanese Film Scenes

（日本語とアメリカ英語の依頼におけるポライトネスレベル比較：日米映画場面からの行動と言語データの分析）

審査委員：(主査) 教授 眞 邊 一 近

(副査) 教授 竹 野 一 雄

教授 Barry Natusch

講師 伊 藤 典 子

### 1. 本論文の目的

本論文は、アメリカ映画と日本映画の依頼場面を談話データとして用いて、日本語と英語の依頼行動、依頼表現とその違いを明確にし、異文化間コミュニケーションにおける効果的な依頼方法を探り、国際ビジネス・コミュニケーションと言語教育に役立てることを目的とする。

### 2. 本論文の概要

第1章は、研究の目的を述べ、第2章は、先行研究で、ポライトネスと依頼の定義である。定義には、Ide等の「円滑なコミュニケーションと関連づけた適切な言語使用に関する考え方」を採用し、ポライトネスレベルを配慮のレベルとする。依頼は、Halliday等が示す物や行為の要求と情報の要求で、前置き、補足情報を含む依頼行動を分析対象とする。Brown & Levinson等のポライトネス理論、依頼行動における背景状況（コンテキスト）の重要性、コンテキストを構成する要因、日英語の発想の違いである個人主義と集団主義と高低コンテキスト文化、要因の影響の計算例、映画やシナリオを利用した研究に触れている。

第3章は、背景状況の依頼行動と依頼表現への影響と、その結果の日英語の違いについて調査することを目的とする。2つの研究課題は、依頼文と依頼の前置き・補足情報に関するもので、依頼の背景状況を形成する個々の要因が、依頼文のポライトネスレベル、前置き・補足情報の数・タイミング・種類に与える影響を調査する。

第4章は、研究方法で、映画における談話の有効性を述べ、データ準備手順では、分析対象映画作品の依頼行動を示す場面から、依頼本体を前置き・補足情報、依頼表現、聞き手の受諾状況を抽出した。要因のレベル化・数値化では、抽出した各依頼場面の背景状況を14要因選択し、2段階の信頼性確認を経て、5段階の数値化を行った。依頼文を命令文、平叙文、疑問文、省略形に分類し、ポライトネスレベルは、文形式に加えて間接性を中心に要素、文の長さを考慮した。リメイク映画試行分析では、2組のオリジナル映画とそのリメイク映画の共通場面を日本語と英語の依頼を比較し、背景状況の要因条件が一部異なる場面との間で変化が表現に与える影響を観察した。談話データ分析手順では、依頼文の文形式とポライトネスレベル、前置き・補足情報の提示数・タイミング・種類、依頼文の繰り返し・言い換えを要因や背景状況ごとに分類・分析後、比較した。最後に、英語文法書と高校オーラルコミュニケーション教科書、ビジネス英語教材、英語の敬語の文献で、依頼の扱い方、ポライトネスレベルや日英語での使い分け基準の違いを確認し、その結果と談話データ分析結果、英語教本・教材分析結果の分析、比較をした。

第5章は、結果と考察である。リメイク映画試行分析では、背景状況の変化が依頼表現のポライトネスレベルに影響し、その影響は日英語で異なることを確認した。また、全く同じ場面でも、日英語で背景状況の捉え方が異なる可能性があった。談話データ観察で、日英語では命令文が依頼形式の大きな割合を占め、女性は男性よりも丁寧な形式を好み、英語では命令文対疑問文、日本語では命令文・平叙文・疑問文内

の敬語比率で確認できた。前置き・補足説明の提示数は、頻度と受諾率で順位に多少の差が見られた。日英語共に、最頻数と高受諾数が小数だったが、その傾向は日本語の方が強く、聞き手責任の文化が提供する情報の数を制限することにつながっている。タイミングは、日英語共に、前置きが優勢であるが、この傾向も日本語の方が強かった。日本語には決まった型があり、英語では比較的自由に選択しているため、わかまえと自由意志の差が出ている。受諾例と拒否例を比較すると、後者の方が補足説明が多い。種類は、注意喚起と理由が重要で、前に提示される例が多かった。最頻数条件は、上司から部下への通常業務の指示の場面でさえ、命令形が多かった。談話分析では、依頼文の文形式とポライトネスレベル、前置き・補足情報の提示数・タイミング・種類、依頼文の繰り返し・言い換えへの主な要因である緊急性、遂行義務、能力・難易度、負荷、利益、上下関係、親疎の個々の影響とすべてを考慮した最頻数の背景状況の影響を男性話者の場面中心に分析した。結果は、基本的に話し手に不利な条件でポライトネスレベルが上がり、日本語より英語、女性より男性に影響が強い場合が多かった。緊急性、遂行義務、能力・難易度、負荷は日本語男性話者より英語男性話者に影響が大きく、上下関係、親疎は英語男性話者より日本語男性話者に影響が大きいことがわかった。日英語共に、女性が男性よりもポライトネスレベルが高いが、英語女性話者は話し手にとって有利な場面のみレベルを下げ、日本語女性話者は狭い範囲でレベルを変化させている。能力・難易度、負荷の話し手に不利な場面で男性にポライトネスレベルの低い表現、遂行義務が高い場面で日本語話者、能力・難易度、負荷の話し手に有利な場面で英語女性話者にポライトネスレベルの高い表現が増える意図的な操作も観察できた。前置き・補足情報に関しては、代表値及び箱ひげ図に基づいて分析を行った。緊急性、遂行義務、能力・難易度、負荷において、基本的に話し手に不利な条件で合計数が増加し、注意喚起、理由、条件追加の順で種類が選択されやすい。提示タイミングでは、緊急性及び能力・難易度、負荷の話し手に不利な場面で前への依存度が下がる傾向が見られた。依頼文の繰り返し、言い換えは、緊急性及び能力・難易度、負荷の話し手に不利な場面でより多く見られた。最頻数条件では、日本語より英語の方が提示数が多いが、結果にばらつきがあり、文形式と前置き・補足情報の組み合わせではポライトネスレベルが一定にはならず、低い文形式は前置き・補足情報が少なく、高い場合は多くなっていた。間接性が高い文形式では、内容を明確にするために前置き・補足情報を増やしている。24冊の英語文法書と20冊の高校オーラルコミュニケーション教科書、各10冊のビジネス英語教材、英語の敬語に関する文献において、厳選されたポライトネスの表現が紹介されていたが、本論文の談話データ分析では多種多様な表現が見られた。

第6章は、結論で、依頼の背景状況を構成する緊急性、遂行義務、能力・難易度、負荷、利益、上下関係、親疎の7要因が、日本語と英語共に依頼行動における依頼文のポライトネスレベル、前置き・補足情報の提示数・タイミング・種類に影響を与えることが判明した。日英語や男女間で影響の大きさの差があっても、日本語あるいは英語のどちらかのみに影響するものはなかった。従って、基本的に個人主義・集団主義の違いを意識しながら、話し手の条件の有利/不利を敏感に判断して強弱を誇張あるいは低減すれば、日英語の違いを超える無難な依頼行動、依頼表現を選択できることが考えられる。

### 3. 本論文の意義と評価

(1) 本論文は、国内外の先行研究の徹底的な調査分析と映画から抽出した分析対象データとしての有効性を十分に踏まえて、業務上の依頼行動、依頼表現におけるポライトネスレベルを対象として、20の日米映画作品の1001場面から得た談話データを丁寧に探究・分析し、円滑で効果的な異文化間コミュニケーションを実現することを可能にした画期的な研究である。依頼表現は、要因のレベルによってポライトネスレベルが変わることが確認でき、緊急性、遂行義務、能力・難易度、負荷はアメリカ英語男女話者により大きく影響し、上下関係、親疎は日本語男女話者の方により強く影響するという結果が出た。さらに、要因のレベルによって前置き・補足説明の提示数・タイミング・種類の傾向が変わることがわかり、緊急性、遂行義務、能力・難易度、負荷が前置き・補足説明の数に、アメリカ英語男女話者の方により大きく影響した。前置き優先は、日本語男女話者でより強く見られた。言語と男女で分けた場合、要因の影響の大きさは、日本語話者よりもアメリカ英語話者、女性話者よりも男性話者により大きな影響が見られ、アメリカ英語男性話者、アメリカ英語女性話者、日本語男性話者、日本語女性話者という順となった。基本的に、個人主義・集団主義の違いを意識しながら、話し手の条件の有利/不利を敏感に判断して強弱を誇張あるいは低減すれば、日本語と英語間の違いを超える無難な依頼表現・行動を選択できると考えられた。

一般的な傾向を実践的で妥当な基準として戦略的に用い、聞き手に期待されるポライトネスレベルを選択することによって、コミュニケーションを円滑に図ることができる。映画の談話データを分析して得た本論文の結果と提言は、英語母語話者と日本語母語話者の間の異文化コミュニケーション、特に国際ビジネス交渉、外交、文化交流に役立つという点を、本論文の第一の意義として高く評価する。

(2) 日本の英語教育におけるポライトネスに着目し、ポライトネスの考え方を教育に反映させる必要性が叫ばれながら、英語教育における依頼があまり調査されていないことがわかった。日本の英語文法書と高校オーラルコミュニケーション教科書、ビジネス英語教材、英語の敬語に関する文献では、厳選された表現と説明が紹介されていたが、本論文の談話データ分析では多様な表現が見られ、依頼の背景状況を構成する要因とポライトネスレベル、前置き・補足情報の数・タイミング・種類に影響を与えることが判明した。よって、日本語母語話者の英語教育、アメリカ英語母語話者の日本語教育に寄与できると示唆したことは、第二の意義として高い評価に値するだろう。

以上、本論文の成果を依頼の理論的枠組みとして戦略的に活用することによって、現在及び将来、より効果的な異文化間コミュニケーションを実現することが可能となり、ビジネス、交渉、政治、外交、文化交流、語学教育がより豊かで有意義なものとなることを提示した秀逸な研究である。なお、今後の課題として、データの数値からさらなる情報を読み取り、分析をより一層多角的に発展させていくことによって、社会言語学研究において新しい道を切り開いていくことを期待したい。

よって本論文は、博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 28 年 1 月 28 日